

「変化」に向き合う主体としての自分

森田 真樹(本学教職研究科教授 国際教育 教科教育学)

教職大学院で、国際教育領域の科目を担当していることもあり、授業のネタとして、「雑煮」を題材に話をすることがあります。「日本では、多くの地域でお正月に雑煮を食べる」と考えると、いろいろな「雑煮」は「同じもの」にみえます。「雑煮といっても、味、具などは地域の食文化を反映して多様である」と考えると、いろいろな「雑煮」は「違うもの」にみえます。当然ですが、「雑煮」という対象自体には、「同じ」も「違い」もありません。「同じ」と「違い」の境界線を引いているのは、対象をみている(みようとしている)私(たち)自身なので、私たちが境界線を作りながら他者を眺め、「同じ」に区分されたものを「包摂」し、「違い」に区分されたものを「排除」することは、私たちの身の回りでも日常的に繰り返されています。そう考えますと、何らかの対象を理解することには、私(たち)自身の境界線を自覚するという作業が伴っていないければ、「理解したつもり」や、「理解したと思っている自分に満足している」というような状態に陥る可能性が高いように思います。

ただ、この自分の中の境界線を自覚することは、容易ではないことも確かです。その厄介さというのは、1つには、多くの場合が無意識であること。2つには、個々人の経験則や価値観、主流文化の暗黙知などから構築されているがゆえに強固で、いわば難攻不落である場合も多いこと。そして、3つには、「他者」(必ずしも具体的な人物である必要はないが)を介在することが効果的であるとはいえ、私(たち)が「他者」を理解するという単方向のベクトルが強くなり、「他者」を理解しながら自己を問いただすという双方向のベクトルとはなりにくいことなどから生じるといえるでしょう。これは、近年着目されている「マイクロ・アグレッション」であったり、社会情動スキル、非認知能力をめぐる課題とつながっているのかもしれませんが。

元広島大学の井上星児教授は、「他者理解と自己言及の往還」による国際理解教育の重要性を指摘さ

れました。井上先生によれば、「自己言及性」とは、「より自分自身について自覚的である、自分がどういった立場にありどのような観点からしかじかの言動をなしているのかということ」を常に自身も認識し、他者にもそれを言明することです。このような視点や姿勢は、国際教育の根本的な原理になるとともに、学習者のみならず、教師の姿勢としても不可欠なものでしょう。もちろん、国際教育の文脈では、すべての他者理解が白紙の状態から始まり、他者は完全に理解できるという理想的な前提で考えるのではなく、「理解不可能性」に目を配ることに留意は必要ですが。

さて、コロナ禍と呼ばれる時代が始まってから1年半が経過しようとしています。この1年半は、ほんとうに様々なことが起こり、様々に思いを巡らせた時間だったと思います(もちろん、現時点で、コロナ禍が終息したわけではないので、振り返るには時期尚早かもしれませんが)。コロナ禍での人権侵害、差別発言などに関する報道をみながら、一見、平穏を装っていても、ちょっとしたきっかけによって、影を潜めていた差別感情が露わになる日本社会の変わらぬ構造や日本人の心性について考えることもありました。新学習指導要領の実施、探究型の学びの拡充や新しい評価、ICTへの対応、「令和の日本型学校教育」の構築など、コロナ禍がなくても大きな変化が求められていた学校教育ですが、それらがコロナ禍によって加速化し、学校、教師、授業などの「当たり前」への気づきが促され、何を変えるべきで、何を変えないべきかについて考えることもありました。

未曾有の危機にあって、また、急速な「変化」が求められる時代にあって、危機の構造や「変化」を正確に理解することは不可欠ですが、さらに重要なのは「変化」に向き合い、「変化」を捉える主体としての自分自身のあり方を自己言及することのように思います。